

F2-48

エクトール・ギマールの設計によるパリ・メトロの歴史と現状に関する考察

A study on the history and current status of the Paris Metro designed by Hector Guimard

○ 小木曾 裕¹Yutaka Kogiso¹

Abstract : Paris is attractive, has many wonderful facilities, and is attractive in terms of landscape. If you know this about Guimard, you will be able to understand the depth of Paris in addition to the orderly charm.

1. 背景と目的

1853年から始まったパリの大改造は、細い路地に悪臭が漂う非衛生的な街だったとも言える。それらを取り壊してできた凱旋門から放射線状に伸びるシャンゼリゼ通りの大通り等やその時建設された建物は高さやベランダの位置等も定められ、整然とした美しい街並みができた。しかし、直線的で味気なく、衣装棚という悪口もあったというが、視線の先まで見渡せる、直線の景観美は世界に冠たる美しい街と称えられる。そのような状況の中、エクトール・ギマール (Hector Guimard (1867~1942) (以下ギマール) は整然とした街に不満をもち、パリでの自身の建築設計に行き詰まり苦悩しながらも、メトロの出入り口的设计に携わったギマールのアイディアの試行について、今後のまちづくりや施設や屋外の計画設計の知見を得ることを目的とした。

2. 調査方法

パリのメトロの歴史の概要や計画設計やその時代背景を把握するため、文献調査を行うとともに、現在のパリのメトロ出入り口の現地調査を数年に分けて実施して、歴史と現場について総合的な考察を行った。

3. 結果と考察

1) パリメトロの歴史

パリ万博 (1898) は、そこには古い時代が終わり新しい時代を迎えようとする 19 世紀末のパリの挑戦があった。およそ 150 年前のロンドンに遡ると 1863 年に地下鉄が開通し地下を蒸気機関車が走るという今では考えられない状況であった、1873 年にイスタンブール、1896 年にウィーン、ブタペストにメトロができ、パリは 1900 年に開かれる万博の準備に追われていた時に会場だけでなく街を芸術の都にしたいとの思いで、同時に開通するメトロの出入り口もひとつの芸術作品と捉えていた。

1873 年にイスタンブール、1896 年にウィーン、ブタペストにメトロができ、パリは 1900 年に開かれる万博の準備

に追われていた時に会場だけでなく街を芸術の都にしたいとの思いで、同時に開通するメトロの出入り口もひとつの芸術作品と捉えていた。

一方、ギマールはパリの装飾芸術学校: 国立芸術学校建築学科に進むが伝統ばかりの押し付けに嫌気がさし中退したという。建築会社に就職し現場で学ぼうとするが、当時のパリは伝統で雁字搦めで新芸術に入り込めなかった。ギマールは整然とした街に不満であった。28 歳(1895)の時パリ 16 区のカステル・ベランジェの設計に行き詰まり、ベルギーのブリュッセルへ旅に出る。その時にアール・ヌーヴォーの建築家の先駆者ヴィクトール・オルタ (Victor Horia)(1861~1947) (以下オルタ) の設計に出会う。19 世紀末に起こった新しい芸術運動の発端は 18 世紀半ばにおきた産業革命にあった。機械で生み出される安易で安価で大量に生産される工業製品に対し、手仕事による自由で繊細で個性的な美を提示したが、それは直線ではなく、植物や生き物などの自然由来のモチーフで、昆虫のモチーフもあった。この思想を建築に取り入れたのが、オルタであった。これをみたギマールは衝撃を受ける。ツタが這うような植物のデザイン。見たことのない正面玄関の生き生きとした線の戯れ、室内もそれまで考えられなかった新しい芸術のデザインが至る所でうねり伸びる。彼は、命が与えられたかのようだと言っている。このアール・ヌーヴォーのアイディアを取り入れ、前述の作品でフランス初の 1899 年第一回パリ・ファサードコンクールで受賞 (32 歳) し^[1]、一躍アール・ヌーヴォーの奇士となる。このこともあり、アール・ヌーヴォーという新しい建築の旗手のギマールにメトロ出入り口的设计者として白羽の矢が立った^[2]。

2) メトロ出入り口のアイデア

メトロ出入り口的设计者に選ばれた時、地下鉄開通まで、わずか半年しかなかった。短い期間で、複雑な形をした出入り口をいくつも作らなければならなかった。ここでギマールは大胆な方法を思いついた。現地で作品を見ると、設置してある出入り口は植物をモチーフとした柱

1 : 日大理工・教員・まち

を下から見ていくと、途中に丸い膨らみがある。これはリベットでつなぎ合わせていたことがわかった。要するに一塊のオブジェのようであるが、組み立て式であり、その方法は、まず完成形をいくつかのパーツにわけて大量に鋳造し、設置場所に合わせそのパーツをつなぎ合わせる。プレハブのような建築工法を採用した。この柔軟な手法を採用したことに目を見張る。

出入り口のオブジェは、茎は優美な曲線を描き花のように電灯を咲かせている。メトロポリタンの文字も味わいのあるギマールの直筆を採用したという。昆虫の硬い羽のようなレリーフのデザインも細部にいたり、自然由来の曲線が用いられ、直線はほとんど皆無である。

ボルト・ドーフィン駅の出入り口は3方が壁に囲まれた貴重なタイプであり、壁面には植物のような絵が描かれ、茎を思わせる鉄の柱が、それぞれの壁を繋いでいる。屋根も特徴的な形で、中央が梁に向かって落ち込んでいて、虫が羽ばたいているようにも見える。まさにアール・ヌーヴォー、植物、昆虫等の自然由来の美が見事に取り入れられている。例えば今でも残るアベス駅 (Figure-1) は建設当初のオリジナル^[3]があり、側面の昆虫の羽のようなものは共通のもので、またこの名前はさらには、今は無くなってしまった待合室付きのメトロ出入り口もこの部分はボルト・ドーフィン駅と同じで、同様のパーツの組み合わせでできていることがわかる。このアイディアにより半年の工期に間に合わせることができた。

3) アール・ヌーヴォー

先述のように、アール・ヌーヴォーは19世紀末に起こった新しい芸術運動で、この思想を建築に取り入れたのが、オルタであった。

しかし、アール・ヌーヴォーとは画一的な大量生産の反発から生まれた物で、ギマールはアール・ヌーヴォーを捨てたのであろうかとの疑問が浮かぶ、これについては、ギマール協会のフレデリック・デクチュレル氏は、「ギマールの考えるアール・ヌーヴォーは単に手仕事の美をさすものではありません」と述べており、早く安く大量につくれ



Figure 1 : Paris metro abbesses station

るものを加工しアール・ヌーヴォーという芸術を世に送り出したと考えられる。その力で人々の生活を美しく

彩る、それがギマールの目指した美であることを捉えることができた。その最たる美は夜に見ることができる。ギマールは出入り口にあたらしい光である電灯をつけた。1900年に開かれた万博は大きな観覧車や動く歩道もあり、蒸気の手先をいく電気が展覧会の目玉であった。そこでギマールは出入り口に電灯をつけたと思われる。まさに新世紀の象徴と考えられる。

4) メトロの現在の状況

ギマールの出入り口と共に、高い技術力をみせた万博は過去最高の4,800万人がおとずれ、パリの大盛況で幕を閉じたとのこと。その後メトロの路線も拡大され、メトロの出入り口も増設され、最盛期には166箇所となる。しかし、現在残っているのはその半分の88箇所である。大成功を収めたはずなのにいったい何故このようになったか、それは原因の一つは当初バス停ほどの数があった駅が統合され、出入り口も減った。さらに時を経て、あたらしい芸術が時代遅れとなったことが一因であったと思われる。しかし、1964年に風向きが変わり、当時、文化大臣であった作家アンドレ・マルローは、国の歴史的建造物として、ギマールのメトロ出入り口を保存すると決定する。「1900年の万博を成功させ、パリにアール・ヌーヴォー建築を根付かせたと評価された」ギマールが19世紀末に開花させた美はこのまちで永遠に生き続ける花となった。思わぬ場所で花を咲かせていた。それはシカゴ、モスクワ、モントリオール、メキシコ、リスボンと芸術の都のパリメトロデイル出入り口を我が街にと世界5つの国で使われていることがわかった。

4. おわりに

街に芸術を、の夢を持っていたギマールはパリから世界へ羽ばたいた。是非パリに行かれたら、メトロから地上に出る瞬間、見上げてみていただきたい。今ではこの街の風景となった世紀末の新芸術、その美しい曲線、命を得たような鉄の自由なうねりを。エクトール・ギマールの作品であるメトロ出入り口は、花の都における挑戦であり、そして誇りでもあった。パリは魅力的で素晴らしい施設が多くありランドスケープ的にも魅力的である。ギマールの、このことも知ると、整然とした魅力に加え益々パリの奥深さを知ることができる。

参考文献

- [1] Academy Edlins (1978) Hector Guimard, Architectural Monographs2, Academy Edlins, Lodon, pp112
- [2] tvtokyo (2018) エクトール・ギマール「パリメトロ出入口」
- [3] 松村美興子 (2000) パリ・メトロ物語 (増刷改訂版), 現代書館, 東京, pp255